

ひこま
歴史回廊
第9部・再考 敵島合戦③

天文二十三(一五五四)年
五月十一日、毛利元就と事
上の協力関係にあった陶晴賢
と手を切り、軍勢を広島湾頭
に進めた。「房頭覚書」など
によれば、毛利方は一日のう
ちに金山、己斐、草津、桜尾
の諸城を接取し、陶の番衆を
追放して敵島を占領した。

■経済活動通し説得

毛利側は、これを「防芸引
分」と称している。周防の大
内・陶と安芸の毛利が、敵味
方に引き分かれたという意味
である。しかし元就自身、挙
兵直後は「現形」(裏切り)
とどういふを使っている。

それまで維持してきた協力関
係を毛利側から破棄したので
あり、陶側が元就の行動を悪
逆」と非難したのは、ある意
味で当然である。

さて、このとき注目される
のは堀立直正という人物の働

防芸引分 電撃的裏切りの挙兵



きである。直正は、武士とい
うよりは商人といふべき存在
で、広島湾頭一帯で経済活動
を行っていた。直正自身が天
正三(一五七五)年に記した
覚書によれば、直正は元就の
指示を受け、大内方の番衆を
説得して金山城を接取し、さ
らには廿日市・宮島の町衆た
ちを毛利方に引き入れたとい
う。直正の交渉が成功したの
は、商人としての日常的な経
済活動を通して、町衆たちと
の間に信頼関係を築いていた
からだと思われる。

■軍事的に重要な島

一方、廿日市の桜尾城にい
た陶氏家臣や神領衆己斐豊後
守たちを説得して城を明け渡
させたのは、吉川元春と熊谷
信直(元春の妻の父)であっ
た。元就、隆元の毛利本隊と
は別行動を取った元春は、手
勢を率いて可部の高松山城で
信直と合流し、沼田・石内の
谷筋を通って廿日市を目指し
たのであろう。

このように、元就の電撃的
な軍事行動の最終目的地は、
廿日市と敵島であった。ちょ
う三年前、陶晴賢が挙兵に
先立って、桜尾城を接取し敵
島を占領したのと同じであ
る。この地域の覇権を争う勢
力がついて、敵島という島が
もつ軍事的な重要性を物語っ
ている。



敵島(奥の島影)をにらむ位置に築かれた
桜尾城跡(手前の緑の丘)

(秋山伸隆・県立広島大教授)

土曜日に掲載します